日吉台新聞

HIYOSHIDAI

発行
日吉台学区
まちづくり協議会
発行責任者
林　堅太郎
編集責任者
野々口　義信

創刊50号記念

日吉台学区
個人情報保護方針
取り扱い文書

自治連合会改革案を答申

組織運営、役員選出などについて提案

改革委

日吉台学区の「自治連合会のあり方を改革する委員会」（林堅太郎委員長）は、学区自治連合会の改革方針をまとめた「自治連合会あり方」を策定、１月開いた自治連定例役員会に答申した。答申は、自治連合会組織の運営や役員選出方法、役割などについての改革案や改定理由などを示し、改革に伴う自治連合会会則改定案、規程案なども添付した。答申内容全文と自治連合会会則改定案は、自治連合会ホームページにも掲載した。

全文、ホームページに掲載

答申は、改革委設置の背景、経緯を説明する「答申にあたって」を記述したうえ「自治連合会の組織、会議に関する提案」▽「自治連合会の役員の選出ならびに分担に関する提案」▽「自治連合会の運営に関する提案」▽「その他の会則変更の提案」―の４提案を提言、提案の趣旨を説明している。

「自治連合会の組織、会議に関する提案」では、会長の職務と権限の分散、自治会運営の効率化、機動化を図るため会長、副会長（会長補佐）、事務局長、同次長で構成する自治連合会執行部を新設、自治連合会執行体制を強化させているのが特徴。また、自治連合会の運営事項などの協議調整を行う役員、部会長、特別委委員長、関係団体、関係機関の責任者で運営する定例連絡協議会は、定例開催をあらため必要に応じ会長が招集、名称を「連絡協議会」に変更した。

「自治連合会の役員の選出ならびに分担に関する提案」では、役員の種別で、現行、副会長３名とあるのを、副会長１名とし、会長補佐として会長職務代行を明確に位置づけた。現在副会長と呼称している夏祭り、運動会当副会長は、行事担当役員と名称変更、環境衛生委員を担当役員として明記した。役員の任期で、任期１年とする規定と役員の再任をさまたげない規定をおのおの独立条項として立てた。ただし会長の任期については、現行「継続して３年を超えることはできない」を「継続して５年を超えることはできない」と変更した。

会長の任期については、継続協議が必要な課題が山積している現況を考え、３年では自治連合会運営の継続性、持続性が担保できないという意見があり改革委では、議論を重ねた結果、５年とする結論をいったん導いたが、一方で長期在任の弊害を懸念する声もあり、「自治連合会でのさらなる協議が必要」との付託意見をつけ、改革委として会長任期については、明確な答申を見送った。

また、役員の職務では、事務局の設置を提案、事務局次長の役割を明記、事務局長の事務処理軽減を図るため自治連合会役員の指名で事務局員をおけることも明記、事務局体制の充実策をうながしている。

会則変更案なども添付

改革委では、例年、改選期で業務多忙で選出が難航する自治連合会長、事務局長の選出方法についても議論が集中。答申では、自治連合会会長、事務局長候補者については、現行の各丁自治会選出の自治連合会担当者の互選から、前年の役員会で候補者を人選するよう自治連合会役員選任規程の改定を提案している。また選任規程改定で、役員候補人選にあたっては、円滑で継続的な自治連合会運営の実現を目ざし「複数年の継続従事が可能な配慮が望ましい」の努力目標を掲げた。

「自治連合会の運営に関する提案」では、運動会、夏まつりについては、開催の是非を含めた実施検討を行い、継続実施する場合も負担軽減の観点から一部作業の外部化の検討を求めた。各種の事業や行事については、多岐にわたる作業があり、個別の見直しや検討は見送った。総会については、総会議案の簡素化、資料作成の外部外注化、自治連合会事務の負担減にアルバイト雇用、事務外注化を提言している。

「その他の会則変更の提案」では、自治連合会の会員退会手続きについて、現在、退会申し込み書の提出するとあるが実際に行われていないので、この部分は実情に合わせて変更、また役員会への会員の傍聴を可能とする規定を加えた。

自治連で議論、結論を

日吉台学区は、居住人口が漸減するなか、65歳以上が50％近くに達する高齢化社会。高齢化が進むなか、従来からの輪番制による自治会の諸行事や役割を等しく分担することが困難になるなど地域社会の姿が大きく変貌、現行の自治連合会の役割、機能が果たせなくなり、自治連合会、自治会の参加の仕方、役割分担のあり方などについて実情にあった柔軟な対応策を求め平成30年４月の学区自治連合会総会で改革委特別委設置を議決。同年８月以降、各丁の代表、学区まちづくり協議会委員、公募委員、自治連合会役員らをメンバーに14回にわたり、検討作業を進めてきた。

答申にあたって林委員長は自治連合会定例役員会で「答申内容を各丁住民におろしていただき、自治連合会で令和２年度いっぱいかけて議論、結論を出してほしい」と述べた。

創刊50号によせて

期待される地域メディア「日吉台新聞」

日吉台学区まちづくり協議会長　林　堅太郎

「日吉台新聞」は、50号に。成熟期を迎えた日吉台の地域社会にとって欠かせぬ地域新聞として、これからも充実した役割りが望まれます。

平成28年1月1日の創刊号から毎月、発行を続け、本紙で50号を数えるに至りました。これは、学区レベルの住民の手作りによる地域情報紙として、全国でも数少ない取り組みではないかと思います。

私の手元にあるこれまでの日吉台新聞を見ると、掲載された記事数が累計481、毎号あたり約10件に上ります。この期間、大きな地域の課題となった幼稚園の統廃合、住民の声を集めて実現する運びになった「認定こども園」の記事が目立ちます。また、まちづくりの一環として取り組まれている空き家対策など、日吉台地域で展開されている様々な事業や各種のイベント、地域行事などが紹介されてきました。さらに、「WE❤ 日吉台　ひよちゃん」が掲載され、日吉台の地域や家族の身近な様子を描いた計25回の四コマ漫画は、私たちをホッコリとさせてくれます。

三日月県知事からも「自分が成長した地域の出来事を知ることができ、毎号楽しく拝読しております」というメッセージが寄せられました。とくに「『空き家対策』については、地域の人材を活用しながら、空き家を見守り、コミュニティの活性化が図られる素晴らしい活動」と評価されておられました。

途中、この新聞の12号分はカラー印刷で読みやすくなっていましたが、これは「ハウジング アンド コミュニティ財団」から空き家対策事業が評価されて、活動助成金が与えられ、その一部をこの新聞事業に充てることが出来たからです。

この日吉台新聞は、学区自治連合会における特別委員会として設置された日吉台まちづくり協議会が発行しています。自治会の回覧や大津市の広報紙とは違って、地域が作り、地域で共有する、地域の人々に向けた情報紙です。しかも、ホームページにも掲載され、大津市の行政機関など外部の方々にも広く読まれております。

「日吉台まちづくり協議会」は、今春から「日吉台まちづくりカンパニー」へと展開します。

日吉台まちづくり協議会は、今春の総会（6月）を経て、学区自治連合会の特別委員会という存在から独立し、「日吉台まちづくりカンパニー」へと展開する予定です。やがて、ＮＰＯ（非営利法人）として、自立した地域組織になることが見込まれます。

その背景の一つに、この間、大津市が進めてきたコミュニティセンター構想における受託組織として「まちづくり協議会」という名称が使われたために、これと混同しかねないからです。しかし、本筋の課題としては、まちづくり協議会が学区自治連合会の特別委員会の位置から卒業して、地域社会における様々な街づくりの課題を実行する事業組織として独自に展開することが求められてきたからです。

この数年間の取り組みの中で、この日吉台新聞事業を始め、子育て支援事業、マルシェ事業、コミュニティスクール事業、空き家対策事業、街並み改善やバス利用促進などの生活改善事業、さらに文化事業などが展開されてきましたし、子供たちも参加するスポーツ健康事業に取り組もうという提案も具体化されつつあります。もちろん、こうした事業がこれまで通り、学区自治連合会と強い連携を欠かせないことは言うまでもありません。

なお、「日吉台まちづくりカンパニー」という名称に使われている「カンパニー(Company)」という表現ですが、ここでは民間の会社、ましてや株式会社などの営利組織のことを指していません。むしろ「仲間、友だち、連れ」、「人の集まり、一団、一行」、「同席すること、同行、付き合い」といった意味あいから採りました。つまり、それぞれの持ち味を生かして集い、まちづくり事業に参加して行きましょう、という表現なのです。

近々、この日吉台新聞紙上で、今春の総会に向けた案内と会員募集を行う予定です。皆様にご理解を頂き、このカンパニーに加わって下さることを期待しております。

新春の風物詩、どんど焼き、もちつき

天高く炎、ひびく歓声

新春恒例、日吉台小学校で、「もちつき大会」と「どんど焼きまつり」が、11、12日の両日、開かれた。もちつきが行われた11日は、真っ青な冬空。どんど焼きまつりの12日は、朝から雲が広がったが、子どもたちを中心に多くの住民が集まり、無病息災と家内安全を祈願、ふるまわれた豚汁と焼きもちを味わった。

伝統行事の良さを日吉台の子どもたちに伝えるため日吉台夢・未来事業推進委員会（森育寿会長）が、平成19年から始め、日吉台の新春の風物詩になっている。

もちつき大会は、小学校の中庭であり、２２３人が参加。子どもたちもお世話をする大人たちに混じって代わるがわるみんなでおもちをついたあと、きなこもちやぜんざいなどにしてもらい完食した。

どんと焼きまつりには、２３８人が参加。同小校庭には、木材を使ったやぐらが組まれ、日吉大社から招いた神職によるお祓いのあと、お正月の松飾りやしめ縄、子どもたちの書初めなどが入れられ火入れ。天高く立ち昇る炎に参加者から歓声が上がった。令和の時代初のどんど焼きは、例年になく炎は高く大きく日吉台にとって良い１年になりそうだ。このあと子どもたちが竹棒の先につけたおもちを残り火で焼き、あつあつのおもちをほおばっていた。

天高く燃えがる「どんど焼き」（上）、残り火でもちを焼く参加者（左）

みんなで代わるがわる「もちつき」

重いキネでもちをつき、会場でさらそくできあがったばかりのもちを食べる子どもたち

冬休みの☆マナ☆ビバ

宿題、イベントみんなで楽しく

学区まちづくり協議会と同社会福祉協議会の子育て応援隊は、冬休み中の12月25と26日の両日、日吉台小学校で同小コミュニティスクール事業「寺子屋プロジェクト☆マナ☆ビバ」を開催、25日は26人、26日は32人の子どもたちが参加した。

25日は、冬休みマナビバ恒例の焼き芋祭りを実施、グラウンドでは早朝、学区社会福祉協議会の焼き芋名人たちが学区内公園の木を剪定した枝を集め火を起こし、子どもたちが、ぬれた新聞紙でくるんだサツマイモをホイルで包み、火の中へ。イモが焼き上がるまで、理科室で先生たちも子どもたちの勉強を支援、冬休みの宿題をした。

焼き芋はおよそ1時間で完成、あつあつの焼き芋をほおばる子どもたちからは「あまい。」「ほくほく。」「あつい。」など笑顔がこぼれていた。

26日は、お楽しみクッキングを行い、みんなで冬休みの宿題をしたあと、家庭科室で、グループ協力し合いホットケーキを作った。出来上がったホットケーキにはそれぞれ自由にデコレーション。生クリームの上にチョコレートクリームをたっぷりのせ、さらにバナナやチョコでトッピングする子、シンプルにバターとシロップで食べる子など個性豊かなオリジナルのケーキができあがった。

「寺子屋プロジェクトマナ☆ビバ」は、学区社会福祉協議会のサポートを受けた事業。子どもたちに夏休みや冬休みなど長期休暇を心豊かに有意義に過ごしてもらうおうと企画された。「マナ☆ビバ」は、次回春休みに開催を計画している。

☆マナ☆ビバで、ホットケーキづくりをする子どもたち

四遊、にぎわう

学区四丁目西自治会の有志によるボランティアグループ「四遊倶楽部（通称　フォーユー）」（会長・西村精一自治会長）が、毎月定期的に催す「フォーユーカフェ」や「ダイニングキッチン四遊亭」が人気、にぎわいをみせている＝写真。開催されるカフェの一角には、住民らが丹精込めて育てた盆栽、子どもたちの書道作品、カフェ常連らの陶芸など力作が展示され、催しに彩りを添えている。

四遊倶楽部は、平成15年から16年にかけて行われた四丁目西集会所の改修工事完成をきっかに住民有志で組織。集会所の有効活用と住民の親睦とコミュニケーションを図るのをねらいに話し合い、カフェや四遊亭、映画会、もちつき大会などの事業をきめた。

カフェは、毎月第３日曜日、キッチン四遊亭は、同第２土曜日に定時開催。カフェには、コーヒー（１００円）、手作りカステラ、ケーキ、（１００円）等が月代わりで提供される。キッチン四遊亭は、参加者負担５００円、酒類、飲食物は持ち寄り。倶楽部では、他自治会の参加者も歓迎している。